

# 編集後記

新潟県中学校教育研究会

理事長 佐藤 靖子

(新潟市立内野中学校 校長)



## 学ぶ意味を求めて

教師自身が楽しんでいる授業は、生徒も興味関心が高くなる。小学校での学習規律や指導方法の良さを継続できている中学校の学力は高い。生徒が課題を把握し、課題解決までの過程における生徒の思考や態度を重視したコーチング（伴走的支援）を行うと、学びに向かう主体性が高くなる。授業づくりや教材開発に関して、日常的に教師間で気軽に相談しあっている。

これらのことは、R5年12月末「義務教育の在り方ワーキング」にて、全国学力・学習状況調査で思考・判断・表現を問う問題の正答率が高い学校と、学習に対する興味・関心や授業の理解度で肯定的回答の割合が高い学校の傾向を分析した調査結果をまとめたものからの抜粋です。

近年では、脳科学の知見により「脳が『楽しい』と感じ、興味関心を高めたり、対象に対してポジティブな感情をもったりすることが、学習にとってもよい影響を与えられています。楽しいだけでは授業にならないと思いがちですが、「何のために学ぶのか」は学ぶ意味の自覚であり、課題が自分事に引き寄せられていれば、調べてみたい、もっと深く知りたい、できるようになりたいという知的好奇心が自然と高まると考えます。目の前の生徒が将来何になるのか、どのような人生を生きるのかは一人一人異なります。全ての生徒たちが自ら納得できるような学習内容の「将来への役立ち感」を均一にもたせることは困難かもしれません。ですが、今学んでいることが将来の自分を助けたり、他者のためになったり、世の中の役に立つこととなったりすることを教師は常にイメージし、時に具体的な事例を示しながら、授業を構築していくことが大切だと考えます。

生徒が何をどのように学ぶのかについて有効な手立てを検証し、目の前の生徒がいきいきと学び合い、学びへ真摯に向かう姿の変容に感動する場面に私はいくつも出会って参りました。これらのことは各郡市で開催されてきた当研究会での授業提案もかなり貢献してきたと感じます。目指す生徒の学びの姿のために、教師同士が学校間を超え、郡市を超えて互いに対話しながらよりよい授業が構築されていく過程が何よりも大切であり、あらためて授業力が教師の生命線であることを再認識できる研究内容が今までも数多く発表されて参りました。

創設61年目を迎えた当研究会では、昨年度に引き続き、学び合う授業づくり「主体的・対話的で深い学び」の中でも特に、「深い学びにいたる授業」に着目し各所で研究を進めていただいております。

この度、本誌へ文部科学省初等中等教育局主任視学官 田村 学 様より特別寄稿を頂戴致しました。ご多用の中、ご寄稿賜りました田村 学 様に深く感謝申し上げます。

田村 学 様は新潟県のご出身であり、会員の皆様の中でも実際にご講演を聞かれたり、著書を読まれたりしている方も多いいと思います。本紙寄稿文もいつでも読み返して頂き、会員皆様の授業づくりの参考にしていただければ幸いです。

新潟県中学校教育研究会は、2年間の指定研究推進事業と、その研究の成果を全会員に伝える「授業情報誌Class」の両輪でこれからも全県の授業を支えて参ります。

指定研究に携わられた関係者の皆様と、本誌の編集にあたり、貴重な原稿をいただいた各全県部長・副部長・指定研究会場校の皆様、各研究推進委員の皆様、編集に携わった事務局に感謝を申し上げ、編集後記といたします。